

かごしまの 昔話

「四郎どんと布団」

昔、百引（鹿屋市輝北町）に米重四郎という人がいたそうです。元は侍の身分であったのですが、明治維新の折、潔く刀を捨て百姓になりました。豪放磊落で、誰とも親しくしておりました。また、しばしば、機知に富んだ言動で周囲の人を笑わせていました。

ある冬のこと、四郎どんは所用があつて鹿児島に行き、金持ちの旦那さんの家に泊めてもらいました。奥さんが、寝床を用意してくれたので、四郎どんは早々と床につきました。

ところが、しばらくすると

「ああ寒か。ああ寒か」と言う声が、離れた部屋にいる旦那さんのところまで聞こえてきます。旦那さんは奥さんに言いました。「田舎んじいさんが、わっぜ寒か寒かち言うておる。行って様子を見てやれ」

そこで、奥さんは四郎どんが寝ているところへ行き、のぞいてみたのですが、思わず、「あれまあ」と言いました。四郎どんは布団の上に体を縮め丸くなってふるえているのです。「四郎どん、掛け布団も下に敷いちよるがね。上から何も掛けとらんから寒か」と奥さんが言いますと、四郎どんは、「こげな薄か布団は、あたいが村じゃ敷いて寝るとでござす。掛け布団ちゃ言いもはん。ああ寒か寒か」と答えました。奥さんは苦笑いをして、納戸に行き新調したばかりの布団を一組運んできました。四郎どんは礼を言いながら、今度はまっすぐ手足を伸ばし、ふかふかの掛け布団



を上掛けたのでした。あくる朝、四郎どんは旦那さんに言いました。「ゆうべはよか布団に寝かせてもろて、ありがとごわした。とこいで、あたいがよな田舎んもんが一度かぶった布団などは、旦那さま宅ではもう使やらんじやろう。あたいにくいんせ」

とっさのことで、旦那さんは「えっ」と言ったなり、次の言葉が出ませんでした。しかし、四郎どんは返事を待たずに、さつさと布団をからげて背中背負いました。そして、別れの挨拶をして我が家に向かつて歩きだしたそうです。

（原話 郷三郎『鹿児島民俗第1号』）
文／有馬英子 絵／二石綱夫

